

13 重度知的障害を伴う自閉症者への日中活動支援

－働くことを目指して活動の場を拓げる－

自立支援局秩父学園 大門亜希子 田中里実

【はじめに】当学園では、入所者を対象に日中活動を行っている。移行支援グループは、作業スキルやコミュニケーション・社会スキルの向上を図ることを目的としている。本事例では将来地域の事業所で働くことを目指し、園内で活動の場を拓げ必要なスキルやマナーを身につけることや、働くことを通して自己肯定感を高めていけるよう支援を行った。その結果について報告する。

【方法】1. **対象者** 診断名：知的障害・自閉症 年齢：24 歳 性別：女性 発達年齢：PEP-III コミュニケーション 29 ヶ月 SM社会生活年齢 3 歳 5 ヶ月 コミュニケーション：<表出> 発話が見られるが不明瞭。コミュニケーションブックを使用して、要求や情報の確認を行う。

<受容>絵や写真、日常的な言語指示の理解が可能。行動特徴：作業の取り組みは良好。褒められることが活動の動機づけとなる。不穏な時は、発声・腕の掻き振り・飛び跳ねが見られる。

2. **目標行動** 本館での仕事を一人で行うことができる（活動内容：本館へ移動する・紙を回収する・シュレッダーをかける・報告をする・グループに戻りゴミを捨てる）

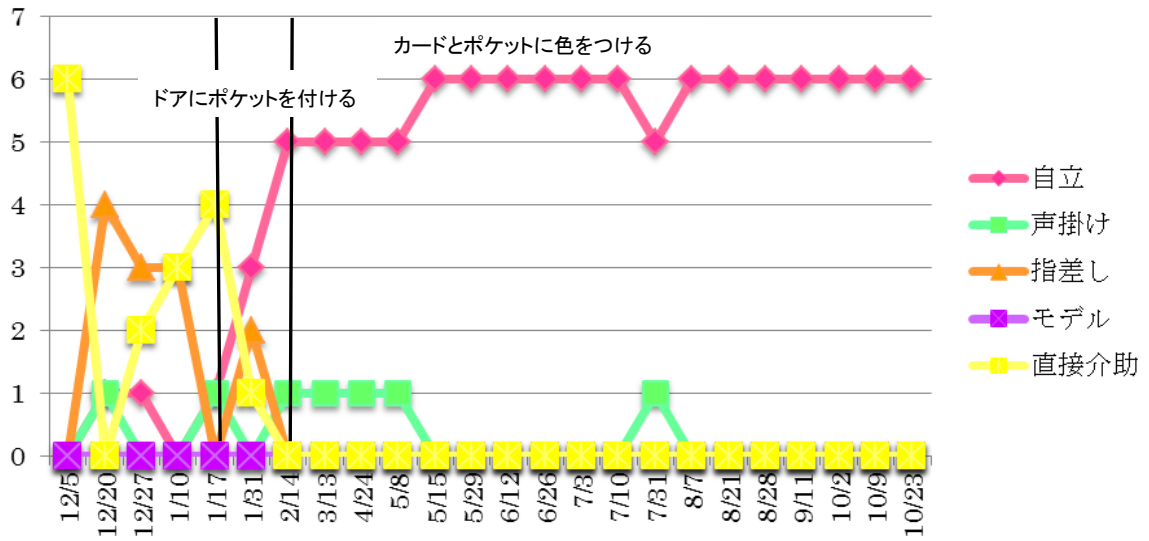
3. **支援内容** <紙を回収する>3箇所紙を回収する手順を課題分析し、細かい支援方法を検討する。移動：各部屋のドアに、部屋にいる職員の顔写真を掲示する。同じ顔写真を使用し、スケジュールで回収先を示す。ドアをノックする：タイミングをモデルで示す。

4. **経過** 移動：回収先をスケジュールで提示したが移動ができなかったため、スケジュールのカードと部屋をマッチングできるようにドアにポケットを設置する。顔写真のマッチングができず、カードとポケットに色をつけ加える。ドアをノックする：ノックをせずに入室したため、再度課題分析を行う。タイミングよくモデルを示すことで、部屋に入る時にドアを叩く意識がついた。受け手側からノックの強さを指摘され、手の甲でノックするよう直接援助で修正する。

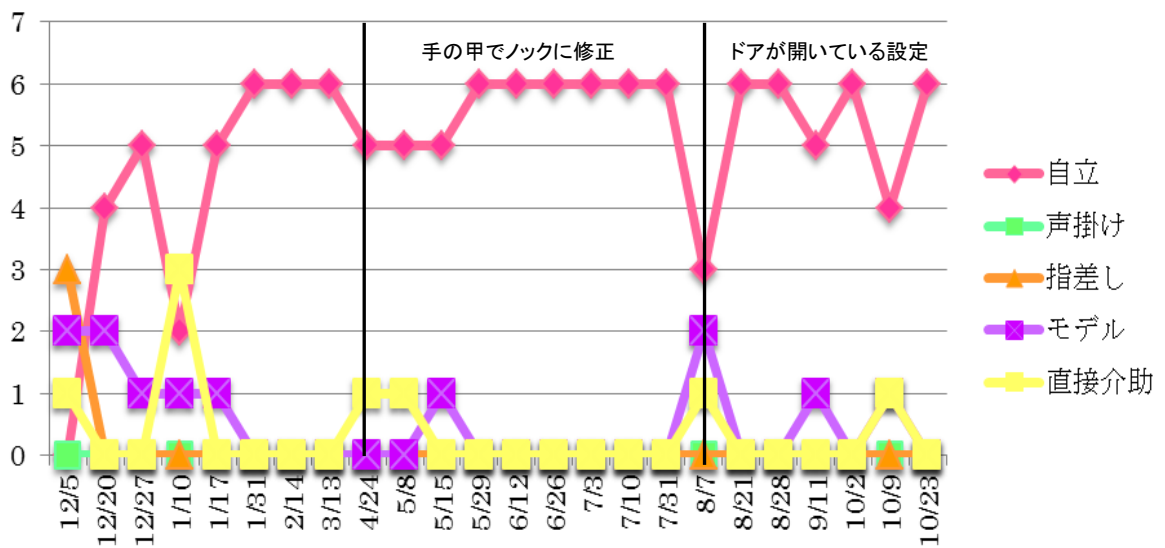
【結果】移動：色を手掛かりにしたスケジュールを使用することで、回収先がわかり自立的に回収することができるようになった（図1）。ドアをノックする：ドアが開いている時でも、ノックをすることが増えた（図2）。ノックの強さは手の甲に修正することで多少緩和されたが、強さはその時々で異なった。本人の変化：当初は、することがわからず不快な声出しがあったが、見通しが持てるにつれて減少し意欲的に取り組むようになった。回収先で職員に褒められ喜ぶ、教室に戻ってから担当職員に賞賛を求める様子が見られるようになった。

【考察】つまずきの原因を探ることに課題分析が有効であったと考えられる。何をするのか仕事の手順をわかりやすくすることで、自立的な行動を引き出すことができたと思われる。一人で行えることが増えたことや褒められることで自信がつき、活動がモチベーションになってきたと思われる。ノックは行動パターンとして習得できたと考えられる。しかし、マナーとしては受け手側からの視点でノックの強さも問われるため、適度な強さでノックすることが今後の課題である。

【まとめ】重度の知的障害を持つ方でも、働く場の環境を整え仕事をわかりやすく提供することで活動の場を拓げることができた。成人期の生活を豊かにするためにも、仕事を一人で行えることや認められる経験を積み重ね、仕事をしたいという気持ちを育てていきたいと考えている。



(図1) 移動



(図2) ドアをロックする